

名古屋外国語大学の「複言語教育」に関する現状報告

The Current Situation of Plurilingual Education of Nagoya University of Foreign Studies

大岩昌子
Shoko OIWA

0. はじめに

世界は既に複言語・複文化主義ⁱという複眼的視座が欠かせない時代となっている。こうした時代に、本学の「複言語教育」はどうあるべきだろうか。結論から言えば、複数の言語を理解し、状況に応じて言語を切り替えて意思疎通を図る言語能力の涵養を目指すにとどまることなく、異文化という他者を寛容し共生する力、そして未知の世界への好奇心を培うための開かれた場所として存在すべきであろう。と同時に、複数の言語が個人内で共存、影響しあうことによるコミュニケーション能力の高度化が期待できる「複言語教育」は、外国語大学としての本学すべての学生を念頭においた理念そのものになると言っても決して大げさではない。

大岩・西川 (2013)ⁱⁱでは、開学以来、外国語学部で実践されてきた「副専攻語学」教育の総括的検証を試みたが、以下、その冒頭部分を引用する。

「複数の外国語を自在に使いこなす」という目標は教員や学生に共有されているだろうか。また実際にその目標は達成されているのだろうか。今のところ、我々は、それを判断する尺度を持たない。なぜなら現在、本学には副専攻語学科目について全体を評価するシステムが存在していな

いからである。ほぼすべての副専攻語学授業が非常勤講師によって担当されていることも問題のひとつと言えよう。現段階では、語学間ではもとより、同一の語学科目内でも、内容、問題点などを教員間で話し合う場は全くなく、学内で共有されている意識、事柄は皆無である。【大岩・西川（2013）、下線部は筆者】

外国語学部では2014年度まで「副専攻語学」、現代国際学部では2016年度まで「エリア・ランゲージズ」という区分で、英語以外の言語を対象とする授業が開講されてきた。必修単位として認められた言語は、外国語学部でドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、ポルトガル語の5言語、現代国際学部では先の5言語以外に、イタリア語、韓国語、インドネシア語、タイ語であった。フランス語学科、中国語学科、日本語学科生のみ、「副専攻語学」として英語が必須とされた。その後外国語学部では、2015年度の新学科（世界教養学科）設置に伴うカリキュラム変更の一環として、「副専攻語学」が「複言語プログラム」へと移行、さらに、2017年度の新学部（世界共生学部）設立に伴い、同プログラムの全学化が施行された。また、履修言語としてロシア語、アラビア語が加わり、現在「複言語プログラム」には、英語ⁱⁱⁱ、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、アラビア語、中国語、韓国語、インドネシア語、タイ語の12言語が用意されている。必修単位としては、以前の8単位から、外国語学部で16単位、他学部で12単位へと大きく増やされた。「複言語プログラム」実施に先立ち、2014年に設立された「言語教育開発センター」は英語基幹プログラム部門と複言語プログラム部門の二部門で構成されているが、後者には先の12言語の責任者がおかれ、開講するクラス数やその担当者の決定など様々な役割を担うこととなった。大岩・西川（2013）は、「語学間ではもとより、同一の語学科目内でも、内容、問題点などを教員間で話し合う場がなく、情報が共有されていない」といった問題意識を端に発したものだが、その後、こうした新たな制度が導入されたことで、必要な情報あるいは問題点が、徐々にではあるが教員間で共有されるようになってきている。

そこで本報告は、大岩・西川（2013）で列挙した①～⑦の提案が、現在の「複言語プログラム」でいかに実現されているか具体的に検証することにより、本学の「複言語教育」の現状を把握、残された問題点や今後の課題を明確にすることを目的とする。なお、大岩・西川（2013）の提案①～⑦は原文のまま引用する。

1. 教育目標の統一化

提案：名外大の副専攻語学（英語も含む）の統一目標を、各レベルでどう設定するか。その際、検定試験、CEFR^{iv}の導入、あるいは独自の尺度の開発の可能性を探る。各学習レベルの学生がそれぞれの達成感を得られ、尚且つ対外的にも名外大の副専攻語学はどの言語を学習しても質の保証がなされていることをアピール可能な形で検討する。

【現状】

「複言語教育」を語るキーワードの一つは「質の保証」だろう。本学のカリキュラムは、とりわけ専攻語学の能力を高めるよう構築されており、学生が複言語学習に多くの時間を割くことが難しい上に、二つの言語を同時に学習すれば共倒れになりかねない等の意見は無視できない。それでもなお、本学の理念とも言うべき「複言語教育」に現実的な存在意義を持たせるには、娯楽的レベルに満足すべきではないだろう。この観点から、まず各言語の責任者により、受講生が目安にすべき、学習レベルに応じた目標が設定された^v。そして、受講生にもわかりやすい形で提示できるという理由から、民間で実施されている検定試験がその具体的指標として提案されている^{vi}。本学では以前より、こうした検定試験に合格した場合、単位への互換^{vii}が認められており、表1は、2016年度に単位互換を申請した学生数を、検定試験別にまとめたものである。これを見ると、合格者数は決して多くないため、各学習レベルの目標が達成されたか否か、残念ながら判断することはできない。「質の保証」をこうした検定試験に委ねる場合は、いかに受験者数を増やしていくかが今後の課題であろう。

一方、すべての言語に共通した「質の保証」はさらに難しいと言わざるを

表1：2016年度検定試験別合格者数（単位互換を申請した学生のみ）

検定試験	級	人数	級	人数
中国語検定試験	4級	20	3級	5
HSK（中国語検定）	4級	3		
ドイツ語技能検定試験	4級	2		
実用フランス語技能検定試験	4級	11	3級	2
ハングル能力検定試験	4級	6	3級	2
実用イタリア語検定試験	4級	2		
スペイン語技能検定試験	5級	2		

得ないが、現在、言語学習の最も重要なポイントのひとつである語彙習得をその材料として検討している。具体的には、言語の入門時から学ぶべき共通の語彙を日本語から1000語を選択、これに対応する当該言語の語彙^{viii}を、すべての受講生に獲得させるという方法である。こうした語彙リストはすでに、2016年にはフランス語語彙集^{ix}として、2017年には中国語語彙集^xとして刊行されている。語彙集では初級レベルの500語、中級レベルの500語が提示され、3年次にこれら1000語が使いこなせるような指導が可能な形式となっている。今後、すべての言語の受講生において同様な語彙教育ができれば、「複言語プログラム」に共通した「質の保証」を目指すことができよう。

別の問題として、学年が進んでも長期休暇を挟むことにより、言語の習得レベルがさほど向上しないという点も常に指摘される。こうした学習の「分断」を回避する方策として、2015年の年度末には、各言語の責任者により春季休暇中の学生に課題が与えられ、次学年のクラスで、その学習状況を確認するという試みを実施されている。例えばフランス語では、前述の語彙集の中から年度末に課題が与えられ、次年度の授業、すなわち中級レベルおよび上級レベルの授業開始時に語彙確認テストを行うというものである^{xi}。今後は、こうした課題が学習の継続性を学生に意識させる効果があるか、また、各言語の課題が学習の進歩や継続にどう機能するか、具体的に検討されていかなければならない。

2. 教材の統一化

提案：中国語、フランス語の教科書を分析したが、他の副専攻語学で使用する教科書の分析も行うことで、どのような授業内容が可能であるか、「実用」レベルまで到達するには何が課題なのか、認識の共有を図る。

【現状】

教科書類は、本学の教育指針が具現化されるための手段として、もっとも慎重に選択されなくてはならない。しかしながら、これまで教科書の採択は担当教員の裁量に任されており、必ずしも方針を反映したものとは言えなかったようだ。現在、ほぼすべての言語で、統一教科書が責任者によって選ばれ、それを授業で共通に使用してもらうよう担当者に依頼されている。よって、各教科書には必然的に各言語が設定する学習目標が反映されていると言えるだろう。こうした統一教科書の採用により、受講クラスによる学習内容の隔たりがなくなり、学年を追って生じる進捗の問題も解消されつつある。ただし、授業では教科書以外の教材も使用されるのが当然であり、それ自体を各担当者が自由に選択することで、授業内容に厚みが出ることは言うまでもない。

3. 習熟度別クラス

提案：習熟レベルや意欲の高い学生にはより学習を進ませるために、英語は1年次1期から、その他の言語は2年次からの習熟度別クラス編成の可能性を探る。

【現状】

習熟度別クラス編成に関しては全く手が付けられていない。受講生の言語学習への適性もさることながら、その動機付けの有無による学習進捗の差は無視できないほど大きい。ちなみに受講生らの複言語を学ぶ率直な動機は、日常会話の習得、文化への興味、将来のキャリア形成、そして検定試験などの資格の取得である。習熟度別クラス編成は今後の課題であるが、運用は簡単ではない。また習熟度別クラスは効果的といえるか、継続的に状況を検討する方向である。

4. 上級クラスの必修化

提案：副専攻語学は1、2年次に履修するだけでは「実用」のレベルにまで達することは到底できない。従って、3年次に当たる上級クラスの必修化、或いは少なくとも通年で1科目以上は受講させるべく方策を探る。その場合単純計算ではあるが、学習時間は初級から上級まで合計で210時間以上を確保できる。

【現状】

学生は、その興味に応じて「複言語プログラム」の中からどの言語でも履修することが可能である。履修制限は特に設けていない^{xii}。2015年度以前の学生は8単位が必修であったが、「複言語プログラム」では、外国語学部で16単位、他学部では12単位が必修となった。この変更に伴い、以前は2年次までに修了していたところ、原則3年次での上級レベルの履修が必修となった^{xiii}。ひとつの言語を上級まで履修する場合、従来よりも学習時間が45～90時間上乗せされ、学習時間は最大で総計270時間となる。この学習時間を考慮して実用フランス語検定試験を例にとれば、3級から準2級取得を目指すレベルに達すると想定される。ちなみに、本学は3年次に留学する学生が多いが、留学先で英語以外の言語を履修しなければ、単位の互換は行われない。

また、2017年度より上級レベルの授業のひとつとして、『世界の言語』という授業を設置した。ここでは国連公用語(英語、フランス語、スペイン語、中国語、ロシア語、アラビア語)と日本語の計7言語を各2回ずつ扱い、主要テーマは、言語・地域を相対化する意識や姿勢を涵養すること、そして世界の言語を知ること自らの学ぶ英語や複言語がどのように位置づけられるか、相対的にとらえる視点を身につけることである。さらに世界の言語、文化に興味を持つこと、複言語への意識が高まることが期待される。各言語とも、原則、1回目は言語の基本構造(音声・文字、文法)やその特徴に焦点を当て、2回目は、使用地域の文化や社会、あるいは言語変化上、類型論的に重要な点について触れるという、各言語の担当者による、オムニバス方式の授業である。今年度の授業修了後、約70名の受講生を対象に実施した授業評価アンケート調査では、100%の受講生が授業に対し興味をいだき、多

文化、多言語に大いなる関心を持ったという結果が得られている。1言語2回の授業は、言語に触れる時間として決して十分とは言えないものの、言語や文化の多様性に意識を向けるという目的はある程度果たされていると考えられる。

添付資料1の各言語の履修者数を見ると、言語間での偏りが気にかかるところだが、現在のところ、受講生数の平均化は考えられない。今後もこの方針は踏襲されるものの、例えば、習得の難しさが懸念され、敬遠される傾向にあるアラビア語、ロシア語、インドネシア語、タイ語などは、3、4年次などでの履修を指導する必要があるかもしれない。

なお、同じく添付資料1によれば、上級科目の履修者が昨年度のそれと比較して、すべての言語で増加している。これは必修単位が8単位分増やされたことを如実に表す。「複言語プログラム」を履修する最初の卒業生を輩出する2018年度には、上級レベルまで履修することでもたらされる効果を検証できるだろう。

5. 語学研修

提案：副専攻語学を対象とする短期研修への参加をさらに推奨する方策を探る。言語を運用し文化に触れるためには現地へ行くことが最も望ましいからである。ただ、現状では、中国語とフランス語の研修のみ実施が可能であり、学科がなくとも、何らかの形で副専攻語学の研修が可能となるシステムの構築を探る。あるいは、専攻語学の研修中に一部副専攻語学の研修も組み入れられないか。例えば研修先をカナダとすれば英語とフランス語、シンガポールで中国語と英語の研修を企画する等の可能性の有無を検討する。

【現状】

本学には122校の海外提携校がある（2017年8月4日現在）が、専攻語学として本学にある英語、フランス語、中国語以外を母語とする地域、例えば、イタリア、ドイツ、ロシア、メキシコ、韓国などにも提携校ができ、現在そうした地域へ留学する際に、「複言語プログラム」での学習が実践的に活かされている。例えば、2015年にメキシコのグアダハラ自治大学に留学した学

生は、現地で、留学生を対象としたスペイン語のクラスと現地の学生を対象とした学部の授業を受講している。

また、2015年度より長期留学制度として、本学の留学費用支援のもと「2か国留学」が実施されている。これは、2か国（または地域）に留学できるもので、留学期間は両方合わせて1年または1年半となるが、留学のパターンとして、「専攻言語を母語する2地域」あるいは、「専攻言語1地域＋複言語1地域」を選択することができる。このような留学制度は複言語学習の動機付けを高めるひとつの要因となるであろうし、今後、英語圏以外の地域への留学形態は本学の強みになるに違いない。

6. ランゲージラウンジの活用

提案：名外大では、留学生等の協力を得て母語話者と自由に会話する場として「ランゲージラウンジ」を設けている。副専攻語学を対象とするランゲージラウンジの運用を考えたい。

【現状】

現在、ランゲージラウンジは英語、フランス語、中国語、日本語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語などで開かれているが、「複言語プログラム」で学ぶ学生も大いに参加しており、実践の場として機能しているよう見受けられる。一方、さらに使用言語が増やせるような工夫が必要かもしれない。

7. 担当者間の情報共有

提案：英語を含めた各副専攻語学の担当者による話し合いの場を持つことが不可欠であり急務だと考える。名外大の副専攻語学の現状を知った今、各言語の担当者は速やかに問題意識を共有せねばならず、それはまた副専攻語学の教育システム構築の出発点となるだろう。

【現状】

本報告冒頭でも言及したが、現在は各言語の責任者が一堂に会する機会があり、一定のレベルで、本プログラムに関わる情報あるいは問題点が共有されるようになっている。また、2016年度には初めて、「複言語プログラム」の

担当者を集めたFD研修会が実施されており、非常勤講師も含めた出席者の中で、プログラムの理念、システムなどの情報や問題点の共有化が図られた。2016年度には、各責任者によって、「複言語プログラムサイト（12のことばで世界と語ろう）^{xiv}」が大学HP内に立ち上げられ、ここでは各言語の魅力や特徴、文化、歴史などが説明されるとともに、具体的な授業方法、推薦図書や映画などが紹介されている。学生が言語を選択する際の参考サイトであるだけでなく、「受験生サイト」としても機能している。

8. おわりに

本報告では、大岩・西川（2013）で行った提案をもとに、2017年度に全学化された「複言語プログラム」の現状を具体的に検証することにより、複言語教育に関わる問題点を明らかにしてきた。「複言語プログラム」の実施に伴う新たな制度によって、担当教員間で必要な情報の共有がなされていること、教材の統一化がほぼ図られたこと、必修単位の増加により上級レベルの履修者が増え、単純に学習時間の増加が望めること、複言語と留学制度との組み合わせにより、より複言語が実践的に活かされているなど、「複言語教育」は、システムを新たにすることで、徐々に進化していることが確かめられた。今後の課題としては、名古屋外大のカリキュラム全体の中で「複言語プログラム」がどう位置づけられるか全学的に考えていくこと、また、「質の保証」が確実になされるよう注意深くシステムを構築していくという2点を集約されよう。

とりわけ非常勤講師が多く配置される「複言語教育」において、授業に対する目標・計画を明確にし、そしてそれを構成員が共有、かつ適切な評価によるフィードバックに基づいて目標・計画に修正を加えて、確実に質の向上を図ることは、至難と言わざるを得ない。だからこそ、今後も常に理念、目標、そして情報や問題点の共有を図るよう努力を続けていく必要がある。

いわゆる第二外国語教育は、古くからその目的として、「実用か、教養か」という二者択一を迫られてきた。その中で本学は、教養教育を重視する外国語大学として、両者のバランスを希求すべきである。そして、そもそも「複

言語教育」で最も涵養されるべきは、言語的・文化的弱者への眼差しであり、そして世界の多様性に触れることで自己を変化させていく姿勢に他ならないのではないだろうか。

今後、「複言語プログラム」の中で扱う具体的な教育内容は各言語の担当者から、具体的な教育内容や目的、達成目標、教育方法なども含め、本論集の3号以降で報告される予定である。

注

- i 個人の内部で複数の言語が共存することを目指す「複言語主義」は、社会の中で異種の言語が共存している「多言語主義」とは異なる。
- ii 大岩昌子・西川真子（2013）「名古屋外国語大学副専攻語学の現状分析と複言語教育の提案」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第45号、pp.89-115.
- iii フランス語学科、中国語学科、日本語学科の学生のみ受講可能。
- iv 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)
- v 複言語プログラムサイト「12の言語で世界と語ろう」https://www.nagoyagaidai.com/plp_special/を参照のこと。
- vi 英語にはCEFRによる基準が採用されている。
- vii 必修単位としては認められていない。
- viii 訳語は一対一対応ではないため、同じ日本語語彙に対して、当該言語では2つの語彙を付加する場合もある。例えば、「知っている」に対してフランス語では2つの動詞が当てられている。
- ix 『フランス語はじめの1000語』言語教育開発センター編、名古屋外国語大学出版会、2016。品詞別に語彙を分類、動詞にはすべて例文がついている。各品詞はさらに初級、中級の2段階に分けられ、それぞれ1年次と2年次の授業でも扱われる。使用方法は担当教員の裁量に任されている。また、春期休暇の課題ともなっている。
- x 『中国語はじめの1000語』言語教育開発センター編、名古屋外国語大学出版会、2017。形式はフランス語と同じである。
- xi 小テストの内容は添付資料2に挙げる。
- xii マスタープランに沿った時間割に制限される場合はある。
- xiii ただし、上級を履修する代わりに別の言語の初級、中級を履修し単位数を合わせることも可能である。
- xiv https://www.nagoyagaidai.com/plp_special/
- xv テストの作成、採点、集計は名古屋外国語大学大学院修士課程2年次生加古夏美さんに協力してもらった。

参考文献

- 大岩昌子・西川真子（2013）「名古屋外国語大学副専攻語学の現状分析と複言語教育の提案」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』45, 89-115.
- 境一三（2009）「日本におけるCEFR受容の実態と応用可能性について」『英語展望』117, 英語教育協議会出版部, 22-25.
- 佐藤文彦・三上純子（2012）「初修言語A（初級）とヨーロッパ言語共通参照枠—ドイツ語・フランス語を例に—」『外国語教育フォーラム』6, 金沢大学外国語教育研究センター, 51-61.
- 財団法人大学基準協会（2009）『新大学評価システム ガイドブック—平成23年度以降の大学評価システムの概要—』.
- 拝田清（2012）「日本の大学言語教育におけるCEFRの受容—現状・課題・展望—」『科学研究費補助金 基盤研究B 研究プロジェクト報告書「EUおよび日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」』93-103.
- 真嶋潤子（2010）「大学の外国語教育におけるCEFRを参照した到達度評価制度の実践—大阪大学外国語学部の事例を中心に—」『外国語教育フォーラム』4, 2-12.
- 吉島茂他翻訳（2001）『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠』朝日出版社.

【添付資料1】

複言語プログラム（英語以外）2017年度Ⅰ期履修者数
（ ）内は2016年度Ⅰ期履修者数

言語	初級	中級	上級
ドイツ語	84 (81)	61 (83)	44 (16)
フランス語	151 (145)	115 (129)	64 (11)
スペイン語	277 (278)	203 (244)	73 (12)
イタリア語	92 (67)	50 (48)	24 (9)
中国語	364 (315)	268 (212)	75 (25)
ポルトガル語	92 (41)	35 (28)	18 (6)
ロシア語	31 (20)	14 (12)	5 (-)
アラビア語	11 (4)	4 (11)	8 (-)
ハンデル	149 (175)	111 (91)	31 (9)
インドネシア語	35 (45)	25 (13)	6 (-)
タイ語	16 (5)	2 (2)	-

【添付資料2】

以下、複言語プログラムのフランス語の授業で共通に行った2種類の語彙確認テストである^{xv}。ただし、実施していないクラスもあったので、添付資料1の受講生数と一致しない。

語彙確認テスト1 フランス語中級 (2017年4月実施)

解答83名 (満点30点 平均17.4点 最高28点 最低2点)

()内は正答率を示す。

I. 次の単語の日本語訳を書け。

- | | | | | | |
|--------------------|-------|--------------|-------|----------------|-------|
| 1. participer | (83%) | 2. penser | (29%) | 3. venir | (75%) |
| 4. fermer | (16%) | 5. acheter | (65%) | 6. jeune | (32%) |
| 7. blanc/blanche | (69%) | 8. demain | (77%) | 9. anglais (m) | (57%) |
| 10. université (f) | (91%) | 11. tête (f) | (17%) | 12. rue (f) | (16%) |
| 13. avis (m) | (4%) | 14. ciel (m) | (42%) | 15. stylo (m) | (39%) |

II. 次の日本語に相当するフランス語の単語を以下の語群から選択せよ。

- | | | | | | |
|---------------|-------|-----------|-------|--------|-------|
| 1. 食べる | (82%) | 2. 望む、欲しい | (71%) | 3. 熱い | (88%) |
| 4. 他の | (68%) | 5. 土曜日 | (94%) | 6. いつも | (77%) |
| 7. 料理 | (64%) | 8. 庭 | (79%) | 9. 飛行機 | (65%) |
| 10. おなかが減っている | (79%) | | | | |

autre	plat (m)	jardin (m)
habiter	avoir faim	eau (f)
manger	chaud(e)	samedi (m)
avion (m)	vouloir	toujours

III. 以下の文を日本語訳せよ。

- | | |
|---|-------|
| 1. Je connais Ken. | (81%) |
| 2. Tous les soirs, je regarde la télé. | (30%) |
| 3. Est-ce qu'il y a un hôpital près d'ici ? | (64%) |
| 4. Quelle heure est-il ? | (81%) |
| 5. Il fait beau. | (56%) |

語彙確認テスト2 フランス語上級 (2017年4月実施)

解答63名 (満点30点 平均13.8点 最高24点 最低8点)

()内は正答率を示す。

I. 次の単語の日本語訳を書け。

- | | | | | | |
|----------------|-------|------------------|-------|-----------------|-------|
| 1. devenir | (17%) | 2. gagner | (10%) | 3. sortir | (31%) |
| 4. pomme (f) | (62%) | 5. journaliste | (90%) | 6. papillon (m) | (29%) |
| 7. chapeau (m) | (34%) | 8. cadeau (m) | (22%) | 9. film (m) | (95%) |
| 10. sale | (7%) | 11. banlieue (f) | (0%) | 12. courage (m) | (53%) |
| 13. grève (f) | (3%) | 14. danger (m) | (76%) | 15. bois (m) | (2%) |

II. 次の日本語に相当するフランス語の単語を以下の語群から選択せよ。

- | | | | | | |
|--------|--------|---------|-------|-----------|-------|
| 1. 選ぶ | (100%) | 2. 予約する | (98%) | 3. 悪く、へたに | (88%) |
| 4. 文 | (68%) | 5. 隣人 | (94%) | 6. 足 | (77%) |
| 7. ソファ | (64%) | 8. 金持ちの | (79%) | 9. 秘書 | (65%) |
| 10. 自然 | (79%) | | | | |

escalier (m)	pied (m)	réserver
phrase (f)	voisin(e)	poser
mal	riche	nature (f)
canapé (m)	choisir	secrétaire

III. 以下の文を日本語訳せよ。

- | | |
|--|-------|
| 1. J'entends la voix de mon petit frère. | (81%) |
| 2. J'arrive à la gare de Nagoya. | (30%) |
| 3. Ça te plaît ? | (64%) |
| 4. Je suis né(e) en décembre. | (81%) |
| 5. Mon frère va se marier avec Marie la semaine prochaine. | (56%) |